少女「エピー」（續）

――エリオットの傑作「サイラス・マーナー」中の可憐の少女――

東京女子高等師範學校教授　岡田　みつ

獨身者の「サイラス」が二歳の幼兒を抱へて如何するだらうと、世話好きのお神さんや、無精の母親達は興がつて噂をしてゐる中に、「ドリー」といふ世話好きのお神さんが、自分の子供のさつぱりした着古しの衣服を持つて來て、「サイラス」に渡しながら、「これからチョッ〳〵と暇を盗んで世話を爲に來て上げませうよ」と云へば、「サイラス」は「有り難う〳〵。だが唯敎へてさへ下れば澤山だ。私は自分で何でもやりたい。此の子が私でなく他の人を好きになると困るから。私は家内の事を一人でやりつけて居るから……習へば何でも覺えられる」と答へた。「大きにさうとも其で衣服は之を一番下へ着せるので次が之」と「ドリー」が敎へるのを、「サイラス」は近眼の顏を差し寄せて見て居た。すると、幼兒は兩腕で「サイラス」の頭を抱へて、クウ〳〵言ひながら彼の顏に唇を押し當てた。「ソレ此子はあなたが一番好きだ！あなたの膝の上に載せて欲しいのでせう。それお抱きなさい。而して着物を着せて御覽。さうすれば初から一切あなたが世話をしたと言ふものだ」と云はれて、「サイラス」は何とも言ひやうのない感に打たれて、身を慄はせながら膝に子供を載せて、着物を被せてやつた。それから又「ドリー」が「その子供は敎會へ連れていつて、命名式をしてもらはなければなるまい」と言ふと、「サイラス」は彼の故郷の敎會では左樣の式を全くしないので顏の

色を變へて驚いた。……が斷乎と「イこャの子の爲には何でもする。此土地で良いとなつてゐる事は、何でもする」と云ひ切つた。それで此幼兒も型の如く洗禮をうけて、「サイラス」の母の名を取つて「エピー」となつた。

一月經ち二月經つ程に、「エピー」は孤立せる「サイラス」と、世間との間の連鎖となつて來た。黄金と子供と！何といふ相違だらう！黄金は何の注文もしないが、日光を厭ふて、鳥の影にも人の聲にも耳を貸さない。「エピー」は始終いろ〳〵の要求をして、光と音と活動を愛して、何にでも手を出し、何にでも信頼した。黄金は「サイラス」の考を一定の圈内より脱せしめなかつたが、「エピー」は變化の好きな、欲望のある人の子であるから、「サイラス」の考も、勢ひ、進行して將來の事に思ひ及ぶやうになつた。黄金は「サイラス」を一時も永く機臺に居て、機の音の外に耳を傾けるなと命じたが、「エピー」は機臺から彼を下ろして稼ぎをせぬ時間を休息の時間と思へと教へた。春日を受けてブンブンいふ蠅さへも、「エピー」が珍しがるので、「サイラス」も物珍らしく懷かしくさへ思つた。

日影長く、金ぽうげの花が野邊に充ちるやうになると、「サイラス」は帽子も被らずに「エピー」を抱いて野の草の上に坐つた。「エピー」は花を摘むとて、ヨロ〳〵歩きまはつて、飛んでゐる蝶に物を言つたり、花を持つて來ては父ちやん〳〵と見せたりした。偶然鳥の聲が耳に入ると、「サイラス」は靜かにと手眞似で制して、「エピー」と二人でその聲を待つてゐた。やがてその聲が聞こえると、「エピー」は得意にアハ、、、、と高く笑つた。かくて「エピー」の智惠が付くに連れて、「サイラス」の古い記憶は喚起せられ、「エピー」の心が伸びるに從つて、彼の心の冷かに凍つてゐたのが緩んで解けて來た。

「エピー」が滿三歳になつた頃には惡戯を覺えて

なか〳〵世話を燒かせるやうになつた。「サイラス」は一通りならず骨が折れて、途方に暮れることもあつたが、可愛いさが先に立つて、どうとも處置がつかなかつた。すると例の「ドリー」が來て、「少しは恐い思ひもさせなくては、子供の爲にならぬから、一度石炭部室へ入れるとか、打擲するとかして御覽なさい。さもないと我儘が募つて姑末がつかなくなる」と注意した。尤だとは信じながらも、「サイラス」は此二の方法には、自分の氣が先づ弱つた。「エピー」に苦痛を與へるのが辛いばかりでなく、萬一「エピー」が彼を愛する量が減りはせぬかとの懸念で。

「サイラス」は忙しい時は、巾廣の長い布で機臺に「エピー」を結ひ付けて置くのが例であつたが、或夏の朝、彼は込み入つた仕事に取り掛つて、切りに鋏を使つてゐた。さて此鋏といふものが、「ドリー」の注意で「エピー」の手に觸れぬやうにしてあつたのだが、そのカッチリと齒の合ふ音、が「エピー」には何ともいへず面白く思はれるので今其鋏が、自分の手の屆くところにあるのを見るや、「エピー」は小鼠の如くに、音も立てずに寄つて來て、鋏を手にして、以前の坐に戻つた。しかも蔽ひ隱す身振りで「サイラス」に背を向けて坐つた。而して、自分を結び付けてある布を、ズザ〳〵ながらも眞二つに切り放して、戸外へと拔け出ていつて仕舞つた。何も氣付かぬ「サイラス」は、「エピー」がいつになく大人しいなと思つてゐた。

暫時して「サイラス」は鋏が入用になつて、初めて此大變事を知り、もしや近くの石坑へでも落ちはせぬかと、其儘去り出て「エピー」や「エピー」やと呼び立てた。あたりを隈なく見渡してもその影さへ見えないので、冷汗が額から雫と落ちて來た。何時拔け出したのだろう？……僥倖にも常に行くあの草原へ、いつてゐて呉れゝばよいが！其草原は草が高く生ひ伸びて居て、一寸見た位で

は見付けやうもなかつた。「サイラス」は其から其と草を分けて覘き歩いて、終に隣りの野へ出た。其先には水の淺い池があつて、岸には軟い泥が廣く縁をとつてゐた。と見ると、「エビー」は其の池の端で、自分の靴をバケツにして、深い馬の足跡へ水を酌み込んでゐた。而して自分は片足素足で暗綠色の泥の中に平氣で立つてゐた。傍には子牛が一疋、垣越しにびつくりしたやうに「エビー」の仕草を眺めて居た。

「サイラス」は何よりも、祕藏の寶が見付かつた嬉しさに、急ぎ抱き上げて頰ずりをしながら、うちへ連れて歸つた。さて戻つて來て、洗つてやる段になつて、始めて「エビー」を懲らせなくてはとの事に思い至つた。「エビー」が又脫け出して、怪我でもしてはと思ふと、常になく氣も强くなつて、一つ炭石部室へと考へた。「惡い子だ〳〵！鋏で切つたり、逃げたりして！いけない子だからこの中へ入つて御出で」といつて見た。「エビー」が驚いて泣くかと思つて居るのに、さも珍らしい趣向だとでも思ふらしく、「サイラス」の膝の上で跳ねて居た。併し兎も角も石炭部室へ入れて、戸を閉めた。暫時すると「此處明け〳〵」と幼い聲がするので、「サイラス」は忽ちに出してやつた。而して、用事もそつちのけにして、「エビー」を洗つたり衣を更へさせたりして、「もう今朝は布で結ひ付けて置かないでもよかろう」と思つて、振り向くと「エビー」はいつか再び石炭部室に入つて居て、其處から眞黑の顏と手を出して、「エビー石炭部室にゐるの」と云つた！「サイラス」は罰を加へることの無効なのを悟つて、「ドリー」に向つて「面白い遊びだと思つて居るのだから仕樣がない。さればといつて痛い目をさせるのは厭だから、少し位惡戲をしても我慢しやう。其内には成人して仕舞ふ」といつた。それで「エビー」は辛抱といふ柔かい毛で裏を付けた暖い巢の中で育てられて、この子には世の中に、恐いものも氣に逆らふもの

も無かつた。

「サイラス」は、注文の糸や織り物と「エビー」と双方を背負つて歩くのは難儀だつたが、一寸の間も「エビー」を「ドリー」の手に委ねたくなくて、何處へでも連れて出た。すると織り屋の子供〳〵ッて家々で持囃して呉れた。「サイラス」一人の頃は、妙な會體の分らぬ人だと皆思ふので、なるたけ口數を少しきいて、早く用を濟ませたが、「エビー」と二人來るやうに成つてからは、皆が笑顔で迎へて、あれこれ樣子を尋ねるから、「サイラス」も一寸腰でも下ろして、子供の話をするといふ工合で、「痲疹が輕くすむといゝネ」とか「獨身者でゐて其樣な子供を引受けやうといふ人は滅多にない。御前さんは、機を織るから女見たやうに器用なのだろう」といふものもあれば、旦那や內儀は「エビー」の手首を觸つて「なか〳〵固肥りだ。うまく育つて丈夫な娘になれば、年寄つた時どんなに手助になるか知れない」と云つたりした。下女達は「エビー」を抱いて鷄や雛ッ子を見せたり、櫻ン棒を振り落して呉れたりするし、子供はソロリ〳〵と歩み寄つてジッと「エビー」を見詰めて、急に頰ずりをしたりした。「エビー」が一所の時は、誰も「サイラス」を厭がらないから此子が「サイラス」と世間との繋ぎになつたので卽ち「サイラス」が「エビー」を好くと、「エビー」は世の中のものを皆好きだから、「サイラス」も、亦、其れが好きになるといふ順に成つて來たのである。

「サイラス」は、「ラブロー」村の生活を「エビー」の立て場から觀察し始めた。「ラブロー」で善いといふ事は、「エビー」に持たせたり爲せたいので、十五年間一瞥もくれなかつた村の事に、耳を傾けて聽いた。金を溜めやうとの一心も、たまつた金が紛失したと同時に消滅して仕舞つた。且又金の無くなつた時の歎きが深くて、新たの金に觸れても、元の嬉しさを覺える事もなかつた。それに今は、金

に代はる子供が出來たので金を稼ぎ出す目的が生じて、金其もの以外に彼の心は誘ひ出されたのである。昔は天使が天降つて、手づから人の手を取つて、滅亡の市から人を救ひ出した。今の世には白い翼の天使はないが、尙人を滅亡の域から導き出すものがある。しかもその手を延べて吳れるものは、子供である事がある。

＊　＊　＊　＊　＊

其より十六年を經過したある秋の日曜に、敎會から出て來た「サイラス」は、六十の聲も聞かぬに、肩が丸くて髮の白くなつた一老翁であつた。「エビー」は十八才の色白の笑窪のある乙女で、縮れた美しい髮の毛は、帽子の外まであふれ出てゐた。人通りの稀な處へ差しかゝつた時に、「エビー」は

「御父さん嬉しくて仕方がない！欲しい〳〵と云つてゐた庭が出來るのですから、もう他に望みはありません。「アーロン」（ドリーの倅）が作らへてやると云ひましたよ。きつとさういふだろうとは思つたけれど」と云ひながら、父親の腕に縋つたり、小踊りしたりして歩いてゐた。

「なか〳〵狡猾な……「アーロン」が來たらば御愛想をよくして有り難がらなくては」と「サイラス」は滿面に、老人の落付いた嬉しさを堪へて答へた。

「そんな事をしないでもいゝの！「アーロン」は其がしたいのですもの」と笑つて「エビー」は又跳ねてゐた。

「サー〳〵その本を御出し。そう飛び跳ねては落としてしまふ」

などゝ話しながら、門口に來ると、ワン〳〵吠聲を立てゝ待ちかねた犬が、周章しく出迎へて、それから子猫を目懸けて飛び付いていつて又戻つて來た。而して母猫は、窓で日向ボッコをしながら眠さうな目で四方を見廻して居た。「サイラス」の小家に手飼の犬猫が增したばかりか、室內にも相

當の家具が出來て、光つて奇麗になつてゐた。

「サイラス」は「エビー」が膳立てをするのを見守つてゐたが、いよ〳〵食事となつては、あんまり口數をきかないでサツサと箸をおいて、エビーが自分の食事をそつち除けにして、犬や猫に戯つてゐるのを眺めてゐた。實際誰でも見とれる景色で、「エビー」の波打つてゐる黄金の髪は光るばかりに照り映えて、ふつくりした腭から頰は紺色の衣裳で、すつきりと尙際立つて白く見えた。而してその肩に子猫がかじり付いてゐると、犬と母猫は左右から「エビー」が態と遠くへやつてゐる肉を手を伸して取りたがつてゐた。

* * * * *

かくて後。偶然の事から「サイラス」の金を盜んだ賊が、彼の小家の近くの石坑の中に、溺死してゐた事が知れて、「サイラス」の金は、囊のまゝ再び彼の手に戻つた。之と同時に、「エビー」の眞の父親である豪家の主人は、惡事が人力を以て隱し了へるものでないと悟つて、「サイラス」の宿に來て、「エビー」が實子である事を白狀し、無造作に「サイラス」の手から娘を取り返へさうとした。

「サイラス」は、再び手中の寶を奪はれさうになつた。彼は其人に答へて「何故其ならば、さうと十六年前に私が此子を可愛いと思はぬうちに、御出なさらなかつた。今となつて娘で御座ると仰るのは、私の身から、私の心を刳ぐり取りなさるといふものです。貴君が此子を捨てなすつたから、神樣が私に下すつたので、貴君に何で親の權利がありませう！幸を授かつても受取らないで置けば拾ふた人のものとなるのです」と息卷いたが、さて我を張つて若しも愛子の出世の妨となつてはと、無念を無理に抑へて「イヤ何も申しますまい！御氣任せになされて、此子に直に御話し下さい。私は妨げは致しませぬ」と聲をふるはせていつた。

さて此場の樣を見てゐた「エビー」は如何したかといふに、「サイラス」の手を固く握つて親だと

いふ人に、斷乎と「ありがたう存します。分に過ぎた仰せで、御志は添く存じますが、此父と別れましては、この世に樂しみも御座いませぬ。いくら榮耀を致しましても、父が家に只獨りで私の事を案じてゐると思ひますと、嬉しくも御座いません。此年頃父と二人で、毎日〳〵幸福で御座いましたものを、今更父と離れて樂しい事が御座いませうや。父は私が參る迄は、憂世に一人ボッチであつたとよく話しますが、今私がいつて仕舞へばやはり以前の一人になります。私の幼い時分から、可愛いがつて育てゝ呉れました父ですもの、私は一生傍にゐて孝行をするつもりで、父と私との間を誰にも裂かせる事では御座いません」と云ひ放つた。

「でも御前よく考へて御覽」と「サイラス」は小聲で注意して「欲しいものが、何でも買へる身分になれるのに、好き好んで貧乏人の間にゐて、麁末の衣服や食物に甘じやうとには、よく〳〵覺悟がいるから」といつた。すると、「エピー」は「御父さん私は後悔する事なんぞありません。馴れもしない良いものを身に着けたとて、身に添ひませぬよ。御洒落をして、馬車に乘つたッて、自分の好きな人と御付合も出來ないやうでは詰りません。よいものなんぞ何と思うものですか」と答へたので、生の親はすご〳〵立ち去るより外はなかつた。

「エピー」は直に庭作りの「アーロン」の妻となつた。「サイラス」と別居はせぬとの條件なので、「アーロン」は「サイラス」の小家に移り住んで、「エピー」のかねての願の花園を家の傍に裝置つて、親子睦じく世を過した。「サイラス」はこの世の中には邪の事もあるが、つまりは正しい事の方が多いといふ事を經驗して、あの若年の折の寃罪事件もその事自身はいまに暗黑であるが、彼の事からして自分に子供が授かるやうになつた事を考へて天道の是なるを、堅く信ずるやうになつた。（終）